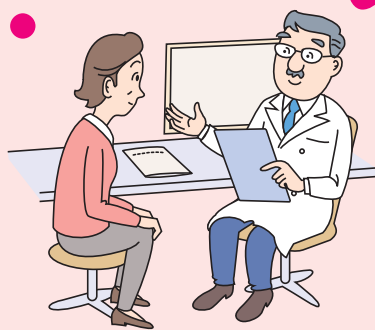


トイレの悩み、相談してみませんか？



「急に尿意を感じて、我慢ができなくなった」「トイレがとても近くなった」

こんな悩みを持つている方は意外と多く、「年だからしょうがない」と諦めてしまう方も多いのですが、こうした症状を持つ方は「過活動膀胱(ぼうこう)」という病気の可能性があり、治療を受ければ多くの方が症状を軽くできるのです。東北大学大学院医学系研究科泌尿器科学分野教授・荒井陽一先生に、過活動膀胱の症状やしきみ、治療についてお話を伺いました。



東北大学大学院医学系研究科
医科学専攻泌尿器科学分野 教授

荒井 陽一 先生

1978年京都大学医学部医学科卒業。1985年公立豊岡病院泌尿器科医長就任。1993年倉敷中央病院泌尿器科主任部長就任。2001年より東北大学大学院医学系研究科・泌尿器科学分野教授。2004年東北大学病院副院長就任。専門は尿路性器腫瘍、泌尿器科機能温存／機能再建手術。泌尿器腹腔鏡技術認定医。

過活動膀胱は どんな症状が現れますか？

一番多いのは、突然、強い尿意を感じてそれを抑えることができなくなる「尿意切迫感」です。時には我慢できずに漏れる場合もあります。これを「切迫性尿失禁」といいます。「尿意切迫感」を何度も経験すると漏れる前にトイレに行っておかなければという不安感で、頻尿になることも多いですね。「昼間頻尿」もそうですが、夜間も何度も起きてトイレに行く「夜間頻尿」も多くなります。

膀胱という臓器は尿を「ためて出す」のが仕事ですが、正常な場合99・9%はためている状態です。さらに他の内臓と違うのは「出そう」と意識して動かせることです。「過活動膀胱」では膀胱が勝手に過敏な働きをするために、尿がたまっていないのに、急に尿意が起るのです。そんなふうには「ためる・出す」をコントロールできないと、絶えずトイレの場所を確認しておかなければなりませんから、日々の社会生活を安心して過ごすことができませんね。

「トイレが近い」ことを「年のせい」とあきらめていませんか？
でも、それは、過活動膀胱(OAB)*という病気の可能性があります。

Overactive Bladderの略

急にトイレに行きたくらい間に合わないかもヒヤヒヤする



家事や電話中にすぐトイレに行きたくなる



夜、何度もトイレに起きてよく眠れない



尿がもれて恥ずかしい思いをした



長時間の外出を避けている



トイレが気になって旅行を楽しめない



病院ではどんなことを調べ、
どんな治療をするのですか？

「過活動膀胱」はきちんと治療をすれば症状を改善させることができます。ところが悩んでいても「老化のひとつだからしょうがない」と諦めて受診しない方が多いのです。特に女性

は医師に相談するのは恥ずかしいと考えがちです。病院での診察や検査、治療の内容がわからないことで不安になり、受診のハードルをあげてしまっているようです。

診療はほとんど問診が中心です。問診票に沿って、1日どのくらい尿をするか、急に尿がしなくなると我慢できないことなどのくらいの頻度であるかなど、簡単な質問をします。他には尿をした時刻や量などを記録する「排尿日記」を、自宅で2〜3日つけてもらうこともあります。問診をする中で他の症状などがある場合は尿検査やエコー検査をすることもあります。

ですが、問診や排尿日記だけで「過活動膀胱」かどうかかわかりません。

「過活動膀胱」の治療は薬や電気刺激などによって行います。多くの方は薬での治療となりますので、日常生活においても特に負担にならずに治療を続けることができます。また、男性の場合は前立腺肥大が原因になっていることが多いため先にその治療を行い、その後「過活動膀胱」の治療薬を処方します。

診療は簡単で、治療も負担になるようなことはありません。現在は泌尿器科以外の先生方も「過活動膀胱」の治療法をよく理解されていますので、冒頭にあげたような悩みや不安を感じたら、かかりつけの医者さんに相談してみてください。